発達障害のある子供の教育に関わる
全ての教員の皆様へ

もしかして、それ…

二次的な障害

を生んでいるかも…？

二次的な障害は、周囲の正しい理解や
適切な関わりによって防ぐことも、低減することもできます。

※ 発達障害のある子供の中には、学校や地域社会において適切な指導や必要な支援が受けられず、適応が困難な状態（情緒不安定、不登校、ひきこもり、精神疾患等）、いわゆる「二次的な障害」により厳しい現状に置かれている子供がいます。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
National Institute of Special Needs Education

◆ 実際の指導場面（子供のつぶやき等）から見えてくる取組のヒント！

ー困難な指導事例を通して、指導のポイントや子供達の気持ちを理解し、適切な指導のヒントをつかみましょうー

事例 1

良好な友達関係の構築

Aさんは、勉強の中でも特に算数が得意で自信を持っている小学生。でも、勝ち負けや順番へのこだわりが強く、友人関係で上手くいかないことが多い。

本当は、
バスの前の席で
景色が見たいだけ
なんだけどなぁ・・・。

Aさんの気持ちは、「○○したい」だけなのに「周りを困らせる行動ばかりする」と誤解されていたようです。このような誤解やレッテルの積み重ねが子供達を苦しめてしまいます。

Point!

通級による指導では、自分の気持ちを伝え、それを理解してもらえる経験を積み、対人関係のルールを学びます。それにより、小集団において友だち関係を築く力を身に付けることもできます。また、通常の学級の担任との連携が大切となります。

学校教育の立場から

【小学校】

● 他者への信頼感を醸成させるためには、仲間意識をもてる小集団の中で、行動や発言が認められることが重要です。また、SSTなどを通し人との関わり方の方法を伝えていくだけではなく、児童自身の思いを大切にし、集団作りをしていくことが大切になります。

● 児童を多面的にとらえ、良さも含めたアセスメントを行う中で「得意を活かしてこうすればうまくいく」という方法、あるいは「苦手なところは代替手段を活用したり、援助したりしてもらえば良い」という援助行動への支援も含めることが重要です。

事例2

不安や思い込みの軽減

Bさんは、学業に困難さはなく学習への意欲ももっている中学生。しかし、友だちの発言の真意や文脈を捉えることに難しさがあり、過剰に反応してしまうことがある。

本当は、みんなの言っていることが良く分からない。全員が自分についての悪口を言っているように思えるから不安なだけなんだ･･･。

Bさんは、状況の理解が難しいこともあり、その中で感じる不安をどのように友だちに伝えれば良いのかが分からず困っていたようです。行動面に焦点が当たってしまいますが、その背景にある本人の気持ちを理解することが重要です。

Point!

通級による指導では、本人の思いや考えを尊重することで信頼関係を構築することが重要です。その上で、場面の理解や状況に応じた言動の取り方を学びます。信頼できる教員の存在は、苦手なことに向き合う際にも非常に大切な基盤となります。

学校教育の立場から

【中学校】

特性のある生徒が、学校や社会で適応し自信を持って生きていくためには「自己理解」が必要です。また、信頼できる人との出会い、その人にSOSを出すことも身に付けていくことが重要です。それが通級による指導に求められていることとも言えます。

事例3

社会性が向上

Cさんは、自分で目標を設定するなど、前向きに学習に取組むことのできる高校生。しかし、人からの親切を、自分に対する特別な好意と捉えてしまうことがある。

本当は、
相手を怖がらせるつもりはなく、
嬉しい気持ちを伝えたかっただけなんだ。

高校生という発達段階では、相手に対して「誤解では済まされない印象」を与えてしまうことがあります。結果として、本人自身が深く傷ついてしまうことがあるため、早急な対応が必要となります。

Point!

通級による指導では、人との適切な距離感の取り方等、個別的に指導を継続することで、対人面での適切な行動を積み上げることができます。また、高校生という発達段階を考慮すると、継続的な指導と同時に、早急に対応すべき課題がある場合には、対応スキルについて具体的に提示することが重要となります。

学校教育の立場から

【高等学校】

高校の通級による指導や学習･生活支援は、小中学校の支援の延長や完成形ではなく、社会接続や進路実現のための第一歩であると考えることが大切です。

自己表現などに課題を持つ発達障害のある生徒にとって、生徒同士の学びあいの中で自己への理解を深めるためには、高校での居場所やよりどころとなる人をどう見つけていくかが大きな課題です。

通級による指導を知ろう

通級による指導では、子供一人一人のニーズに合わせ指導をおこないます。子供が主体的に学習や生活上の困難を克服し、通常の学級や社会の中で**質の高い人生**を歩んでいくことをサポートしていきます。

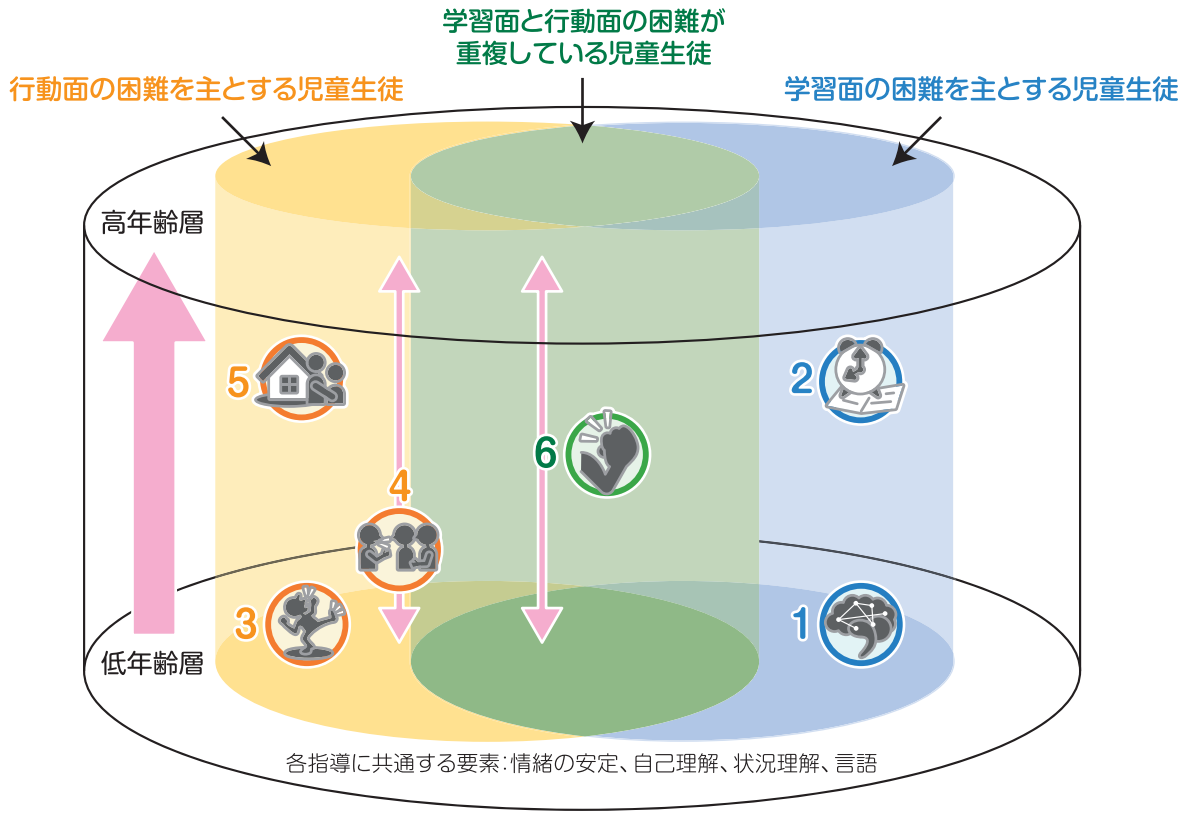
本研究では、発達障害のある子供へ専門的な見地から支援を提供する「通級による指導」において、どのような指導がなされているのかを子供の困難さと年齢層という切り口から整理しました。結果、図表に示した**6つの内容**があることが示唆されました。

図は、各指導がよくみられる場面（**年齢層と児童生徒の困難**）を踏まえて6つの内容の関係を表わしています。

もちろん、それぞれの指導の内容は**どの場面でも必要**になるものです。学校では子供一人一人の学びにとって**最適な環境**を整えていくことが大事になります。

なお、6つの指導は、本紙3つの視点「学びへのアクセス」「自己理解」「信頼感」とも密接に関係するものです。

これらの研究知見の詳細については報告書に記載していますので、そちらを参照してください。



指　導		指導の特徴	指導がよくみられる場面	
			学校種（年齢層）	児童生徒の困難
1	感覚や認知の特性を踏まえた指導	得意な感覚や認知を有効に活用した指導をおこなうこと	小学校	学習面
2	学習習慣の指導	学習の仕方や態度を含み、学習習慣を形成するための指導をおこなうこと	中・高等学校	学習面
3	行動制御の指導	行動（または運動・動作）を抑制したり、コントロールしたりするための指導をおこなうこと	小学校	行動面
4	社会的コミュニケーションの指導	人との関わりややり取りを促すための指導をおこなうこと	小・中・高等学校	行動面
5	生活基盤の指導	心身の健康を維持改善し、生活の基礎を整えるための指導をおこなうこと	中・高等学校	行動面
6	自己効力感の指導	「自分はできる、やれる」という自己効力感（自己の可能性の信念）を育て、学習や活動への意欲を促すための指導をおこなうこと	小・中・高等学校	学習・行動面

※本研究で実施した調査における全体のサンプル数は、発達障害及び情緒障害通級のある学校1,238校（小642、中478、高116、不明2）、通級担当教員1,778名（小974、中626、高178）でした。なお、各ページの結果を導くために利用され た有効サンプル数は、分析により異なっています。

学びへのアクセス

LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、ASD（自閉スペクトラム症）の異なる障害種や、発達段階（小・中・高）においても「代替手段の使い方（PCやタブレットの使用）」、「テスト等を受ける際に必要なスキル」に関する指導は、40%に満たないことが調査結果からわかりました。しかし、これらはいずれも「合理的配慮」に通じるものです。自分にどういう特性（得意、不得意）があり、どういう手段で補えば、苦手さや困難さを克服できるかを考え、成功経験を積むことは非常に重要です。こうした自己の特性理解を支援することこそ、通級による指導の本務とも言えます。

さらに、代替手段やテスト等を受ける際のスキルの習得は、**通常の学級での授業や、テスト場面で使用することを考えると、通常の学級との連携は不可欠です。**具体的には、通常の学級における代替手段の意義や合理的配慮の必要性の理解、スムーズな活用に向けての環境作り等が挙げられます。

学びへのアクセス：通常の学級での学習活動への参加をスムーズにし、障害による障壁をなくし、児童生徒の能力を最大限に発揮できる状況を創り出すこと。

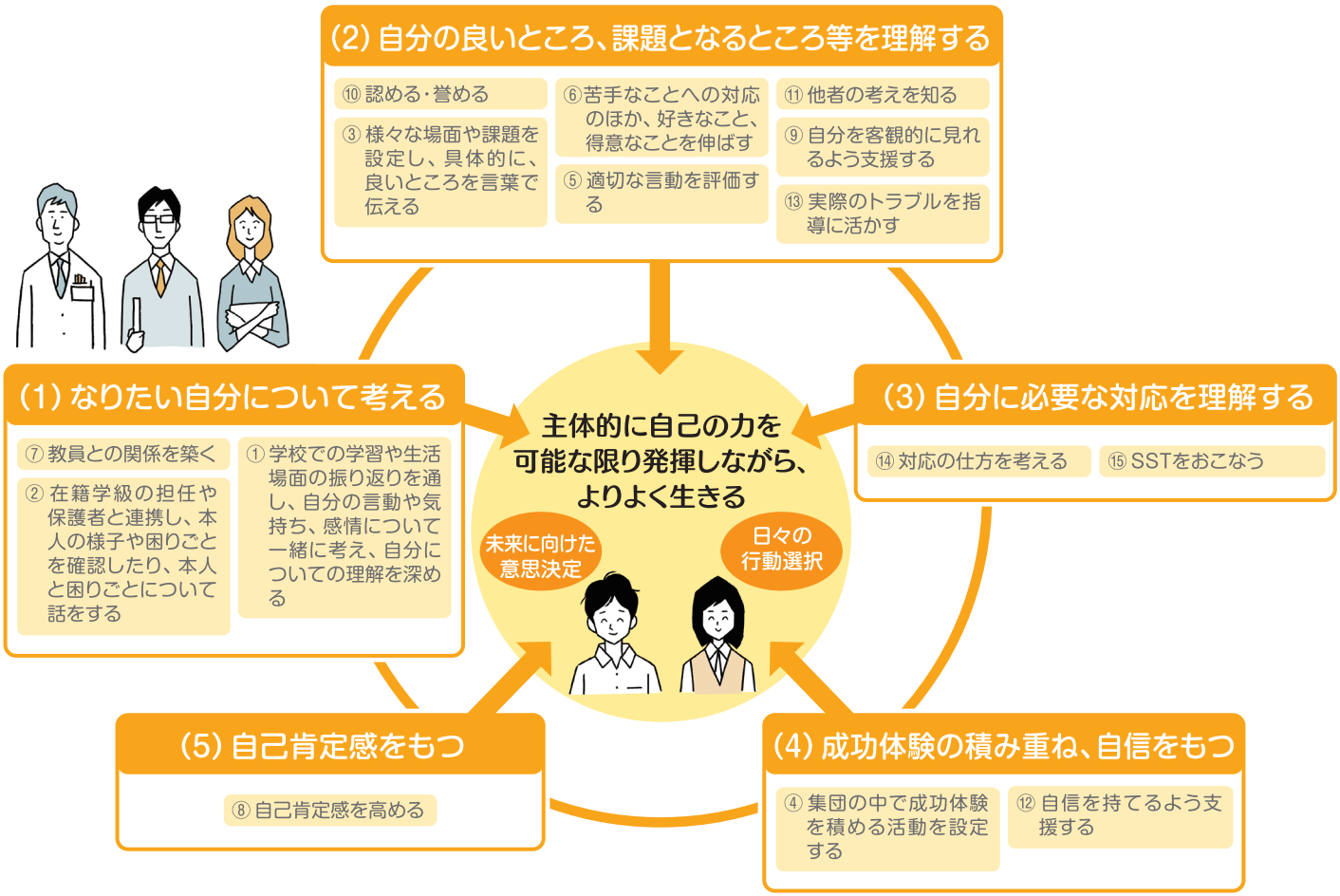
自己理解

通級による指導において、自己理解に関する指導・支援は、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、ASD（自閉スペクトラム症）の異なる障害種や発達段階（小・中・高）でも高い割合（8割以上）で実施されており、子供の自立に向けた力を育む上で重要と認識されていることが分かりました。

子供の自己理解を深める上で、通級担当者が特に重視している指導・支援の内容は、図に示した ①～⑮ の内容に整理されました。また、こうした指導・支援を効果的に進めていく上で、5つのポイントが重要になると考えられます。

自己理解に関する指導・支援に当たっては、**子供の「こうなりたい」という願いが出発点となり、成功体験による自信の獲得や自己肯定感の向上を軸**としたうえで、自分の課題となる点に理解と必要な対応方法の検討やソーシャルスキルトレーニング（SST）等を進めていくことが重要となります。

また、通級による指導の学びを在籍学級で活かすためには、通級による指導の担当者と学級担任が連携することで、指導・支援方法を共有し、温かな見守りを行っていくことが重要となります。



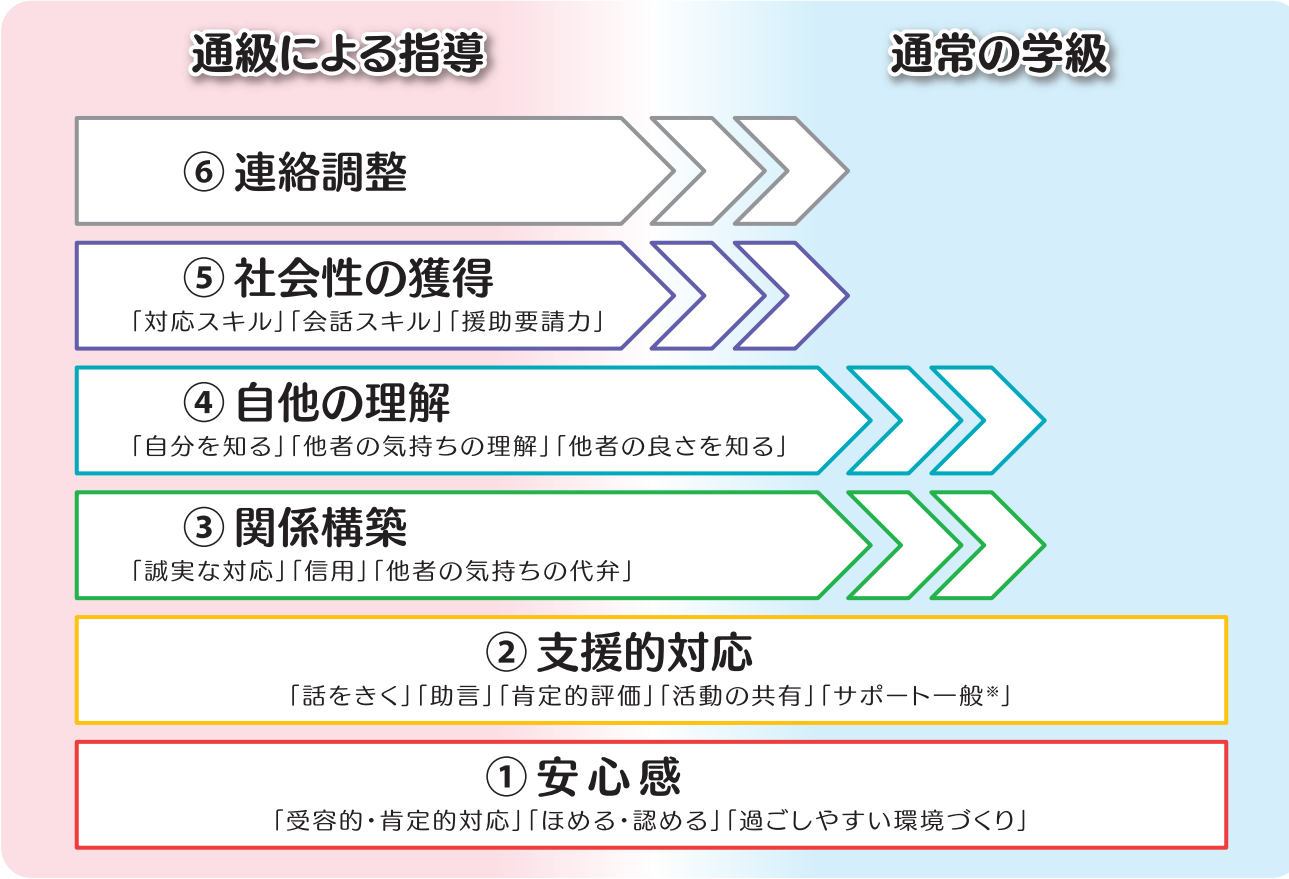
※研究協力者との協議結果を踏まえて指導・支援内容の整理を行った。
※共起ネットワーク分析で得られた知見を、各ポイントにおいて参考となる指導・支援内容として例示。各ポイントと一対一ではない点に留意。
※各ポイントの番号には、順序性があるわけではない。ただし、一つのケースとしてこうした順序性による指導の展開もありえると考え記載した。

図　自己理解の指導・支援に関する5つのポイント

信頼感

「信頼感」は、人と関わる中で育まれる感覚です。私たちは適度に「信頼感」を持っていることで、安定した対人関係を築いたり、困った時に人に頼ったりすることができます。ですが、発達障害のある人は、障害特性が理解されづらいため、怒られたり、否定されたりしやすく、信頼感が低くなりがちです。では、子供の信頼感を育み、二次的な障害を引き起こさないためには何をすればよいのでしょうか?

「どこ」で「どんな」支援や指導をすればいいの?



※「サポート一般」とは「困った時に助ける」などの対応です。

通級による指導の担当者に**「信頼感」を育むために重要と考えて取り組んでいる支援や指導**についてたずねました。その結果、**「①安心感」**を与えること、**「② 支援的関わり」**をすること、**「③ 関係構築」「④ 自他の理解」「⑤ 社会性の獲得」「⑥ 連絡調整」**に関することの6つに整理されました。6つの支援や指導の中でも、①と②は通常の学級でもぜひ取り組んで欲しいこと、③〜⑥は通級による指導でよく取り組まれていますが、通常の学級でも取り組みが期待されることです。通常の学級と連携することで、より効果が期待されます。

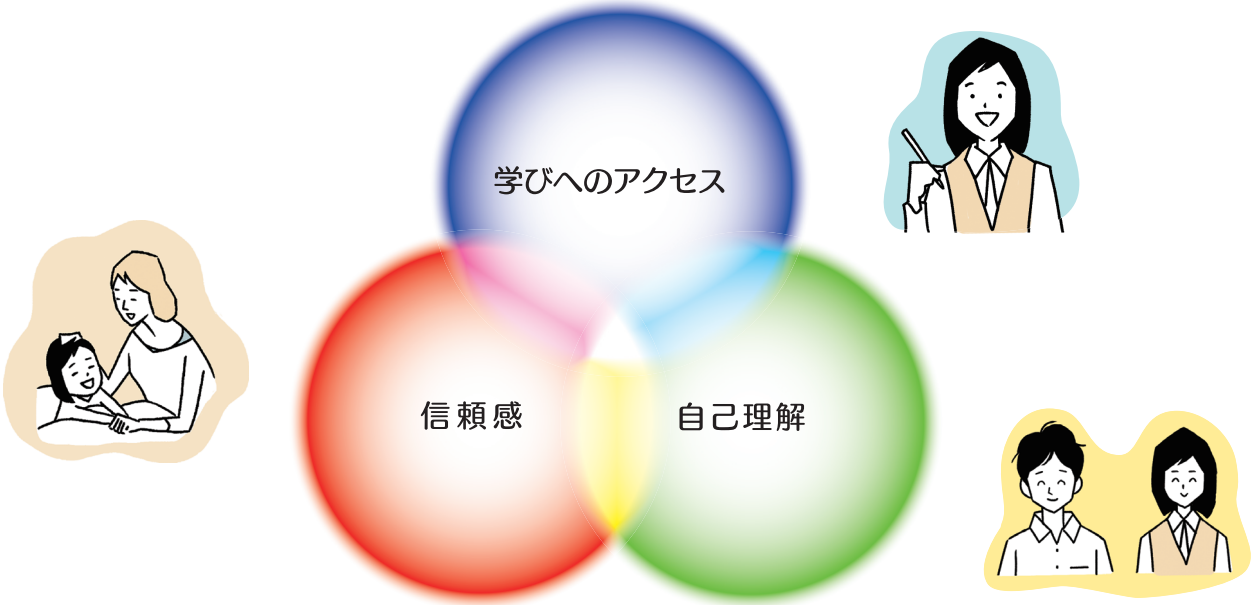
通級による指導で取り組まれている支援や指導は、通級による指導の場のみならず、在籍する学級でも取り組まれ、子供が生きやすさや、学びやすさを実感できるようになることが大切です。そのため「⑥連絡調整」に含まれる「連携」の取り組みは通級による指導における専門性の1つとされています。通常の学級からも積極的に子供の様子や指導の内容を発信し、相互に「連絡調整」が発展していくことが期待されます。

発達障害のある子供の教育に関わる全ての教員の皆さんへ

本研究では、二次的な障害の予防の観点について、福祉や矯正教育などの関連機関からも情報収集・協働しながら検討し、重要となる視点を明らかにしました。その際、特に発達障害のある子供にとっての有効な指導の場の一つである「通級による指導」、さらには、その通級による指導において特別の教育課程を編成する場合に参考にするとされる特別支援学校の指導領域である「自立活動」にも焦点を当てました。

本研究で明らかになった３つの視点「学びへのアクセス」「自己理解」「信頼感」は、いずれも目新しい知見ではなく、これまでも重要視されてきたものだと言えます。しかし、これらを実際に教育の中で実践していくことは容易なことではありません。子供たちが社会の中で自己実現できるよう、学校教育の中で、友人や教員等との間に信頼感を育みながら、学びを楽しみ、こうなりたい自分に少しでも近づけるよう支援することが学校教育の目指すべき姿です。

このリーフレットを、通常の学級、通級指導教室をはじめとする、発達障害のある子供の教育に関わる全ての教員の皆さんにご覧いただき、子供たちが少しでも二次的な障害を味わうことのないよう願います。



本研究で明らかになった重要な視点

福祉、矯正教育の立場から

【福祉】

● 二次的な障害は、担当の教職員との関係悪化だけがきっかけではなく、本人を取り巻く様々な環境から影響を受け、発症することもあるため、周囲の支援者はもちろん、本人も無意識のまま症状が悪化してしまうことが多々あります。学校関係者だけが二次的な障害への対応やその予防の責任を負うのではなく、児童期・思春期の専門家、心の専門家、地域の支援者との連携や役割分担も含めた上で、「予防・支援プラン」を立てるスキルが、教育現場の支援者に求められているように思います。

【矯正教育】

● 就労支援・修学支援を中心に、社会定着支援のために、関係機関が連携した取り組みが始まっています。在院中の本人への働き掛けだけではなく、出院の前から、本人を取り巻く周囲（保護者、雇用主）が本人の「特性」を理解するための働き掛けが重要であると感じます。

● 発達障害を有する者に自己の特性を理解、受容させるということは、出院後に適切な支援サービスを受けながら地域社会のセーフティネットに包摂されるための前提となります。社会復帰支援における福祉的支援体制を確保するためには、支援を受ける心構えを持たせることが大切です。

このリーフレットは、基幹研究（発達・情緒班）：「社会とのつながりを意識した発達障害等への専門性のある支援に関する研究ー発達障害等の特性及び発達段階を踏まえての通級による指導の在り方に焦点を当ててー（令和元年度～令和2年度）」の研究成果をもとに作成しています。